

# 帰化武将沙也可（金忠善）に関する評価の変遷

李 寶 燮

（受付 2007 年 5 月 10 日）

## 1. は じ め に

沙也可は壬辰倭乱（1592年）、つまり文禄・慶長の役の時に加藤清正配下の武将として参戦した。しかし、この戦いには大義がないとして秀吉軍に反逆し兵三千を率いて朝鮮軍に投降し、その後は朝鮮王朝のために働いた。その功績により沙也可は当時の朝鮮王、宣祖王より金忠善（キム・チュンソン）という韓国名と一族のための村、友鹿洞を賜った。金忠善は朝鮮王朝と韓国の安定のために清廉なその生涯を捧げ、1642年72歳でこの世を去った。

この沙也可の子孫は、現在も韓国大邱広域市の近郊に位置する友鹿洞に住んでいるが、300年の間ほとんど知られることなくその歴史的事実は埋もれていた。1933年にこの事実に関心をもち、光を当てたのが中村栄孝（後の名古屋大学教授）である。

沙也可は実在人物であったにもかかわらず、時代の必要性によって時代の裏に隠れてその存在が消されたのである。その中でも徹底的に消された時代は植民地時代である。

本稿では、帰化武将沙也可に関する評価の変遷を重点に考察し、その過程を辿って行くことで現代の沙也可像が持つ意義を提示すると共に、日本と韓国の歴史に対する正しい共通認識が芽生えた上で今後の歴史を築き上げていく事が出来ると考えられる。

## 2. 沙也可に関する記述（評価）の変遷

### 2.1 壬辰倭乱

豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）は、1592年～1598年にわたる長

期の戦争になり、2 度にわたって朝鮮に総勢30万人に及ぶ大軍を送った。当時日本は各地方の大名たちが独立勢力として互いに勢力争いをした戦国時代であった。大名たちは自分たちの領地を持ち、無視できない力を持っており、豊臣秀吉は大名たちに配分する新しい領地を確保し、不満を解決する必要があった。また、対外交易を願う日本国内で声が段々と大きくなっていたことも一つの原因であった。

戦争が始まり日本軍が勝利を続けていく中で、朝鮮軍はろくに戦いも出来ず一方的に攻められる状況であった。その大きな原因として挙げられるのは朝鮮軍の武器がとても貧弱だった事が伺える文章が『慕夏堂文集』<sup>1</sup>に記されている。

少将東投講和之後 即伏見本国兵器則雖有過鉞戟斧鉞雖弓礮弩 而其於臨陣戰鬪之際 一無精銳之可言者 不勝慨然 昔者 晁錯之言曰 器械不利 以其卒與敵也 臨陣而器械不利者 豈非兵家之大患耶 日本兵器之最精者 有異於是 一曰火砲 二曰鳥銃 俱是兵家之最精而發無不中 中無不死 雖有智勇之絕倫 而無奈於中丸 雖有才略之過人 而莫禦於飛丸 強弓之所不能當也 利鉞之所不能接也 實天下之最妙者也

これは沙也可が節度使に送った手紙<sup>2</sup>の内容であるが、朝鮮側の武器として刀、槍、斧、弓があるが、戦闘に際して使えるものがほとんど無く嘆かわしいと述べている。それに対して日本の武器は精鋭で、一に火砲、二に鳥銃、共に最も鋭利であり討って当たらない事なく、当たって死なない者がないほど優れているので弓や刀では、いくら勇敢な兵士でも敵わないほど強いと紹介している。

戦局が変わり、日本軍の戦勢が段々と不利になっていった要因の一つとして挙げられるのは降倭たちの活躍もあった。仲尾宏 (1999)<sup>3</sup> は、日本側

---

1 『慕夏堂文集 附実記』賜姓金海金氏宗会 40項

2 『慕夏堂文集 附実記』賜姓金海金氏宗会 40項

3 仲尾宏 (1999) 「秀吉の朝鮮侵略と降倭・沙也可」『人権講座公演録』23頁

の資料をもとに多数の降倭がいたであろうと推定している。『宣祖実録』の宣祖28年6月13日の記録には「宣祖の降倭政策」として、日本軍からの投降者は殺さず情報を得るか、または兵力として活用するなど、をして降倭に対する方針を変えたのである。このような「宣祖の降倭政策」により降倭たちは兵力として朝鮮軍の側にたって鳥銃の伝授や日本軍との戦いにも参戦した。降倭の鳥銃の伝授により、戦局が変わり降倭は自ら鳥銃を持って朝鮮軍と一緒にたって日本軍と戦ったのである

以上のように、文禄・慶長の役で降倭の存在とその多数の降倭が朝鮮側を勝利に導いたことが確認されたのである。その中の一人として沙也可が挙げられる。

## 2.2 沙也可の帰化

沙也可は加藤清正の先鋒将として兵三千を率いて1592年4月11日日本から出兵し、4月13日に釜山に上陸したが、その戦争を豊臣秀吉の不法的な侵略戦争だとし、大義がないと認識したのである。当時の朝鮮の平和な社会像、人倫、道義、文化などに憧れ、4月15日、「曉諭書」<sup>4</sup>を発表して4月20日、兵を率いて朝鮮軍に投降し、帰化したのである<sup>5</sup>。13日に上陸して15日に「曉諭書」を発表した事からも、沙也可が朝鮮との戦闘に最初から意志が無かった事が分かる。沙也可はこの「曉諭書」の5日後の4月20日には節度使に「講和書」<sup>6</sup>を送り、帰化を願っている。この「講和書」で沙也可はその事を明らかにしたうえで次のように帰化の切実な気持ちを表している。

今此僕之所以向帰義者 智非不足也 力非不贍也 才非不逮也 勇非不壯也 非兵革之不精也 非器械之不利也 兵甲之堅 可以摧百万之師也 謀画之秘可以壓千丈之雉 ……然而区区所願者 徒仰礼儀文物

4 「曉諭書」壬辰四月十五日『慕夏堂文集・附実記』前掲書

5 金在錫（2000）『金忠善沙也可・友鹿里』鹿洞書院 105頁

6 『慕夏堂文集 附実記』賜姓金海金氏宗会 37～38項

之美 衣冠風俗之盛 願為聖人之氓於礼儀之國也

沙也可は自身が帰化の志を示すようになったのは、知恵が足りないからでもなく、力が足りないからでもない。また勇気がないためでもなく、武器が鋭くないからでもないと述べ、ただ平素の所願であった朝鮮の礼義文物を慕い、礼儀の国で聖人の百姓になりたいだけだとその本意を表している。

### 2.3 朝鮮における沙也可の活躍

沙也可は朝鮮出兵（文禄・慶長の役）の1592年に朝鮮に帰化して以来1636年に至るまで生涯 6 回も戦場に出陣し、朝鮮王朝のために働いた。その 6 回とは次のとおりである<sup>7</sup>。

順次	年度	年齢	王朝	戦乱名
1	1592	22	宣祖25, 壬辰	壬辰倭乱（文禄の役）
1 次褒賞	1592年 ○ 除嘉善（従二品） ○ 特賜我朝冠服及青布三千疋 以為将兵服色			
2 次褒賞	1593年 4 月 ○ 特賜姓名 金忠善 ○ 加資資憲（正二品）			
2	1597	27	宣祖30, 丁酉	丁酉再乱（慶長の役）
3	1603 ～ 1613	33 ～ 43	宣祖36, 癸卯 ～ 光海君 5, 癸丑	北方国境地帯防衛 自願仍防十年
3 次褒賞	○ 振旅に於還朝 自上引入後苑大設犒饌 ○ 加正憲（正二品）			
4	1624	54	仁祖 2, 甲子	李适叛乱
4 次褒賞	○ 以牙之田庄 賜牌			
5	1627	57	仁祖 5, 丁卯	丁卯胡亂
5 次褒賞	○ 今番従軍者依前例為先復戸一結			
6	1636	66	仁祖14, 丙子	丙子胡亂
○ 不待召命星夜馳赴京師 和議已成南下				

7 金在徳（2000）42頁

沙也可は帰化して、すぐに朝鮮のために数回にかけて戦場に出陣して多大な功績をあげている。1 回目は、1592年の文禄の役に出陣して1年の間宣祖王から2度の褒賞を受けている。その褒賞の内容として注目するところは従二品と、正二品<sup>8</sup>の官職を受けた事である。特に1593年4月には宣祖王から朝鮮の民として認められ、金という姓と、忠善という名を賜った。2 回目は、1597年の慶長の役に出陣している。3 回目は1603年から1613年までの10年間で、満州族に毎年国境をこえて侵略され、朝鮮王朝の不安がおさまらないため、沙也可は自ら北方国境地帯を10年間続けて防衛することを志願している。これによってまた3度目の褒賞である正憲（正二品）を受けている。4 回目は1624年3月に李适の叛乱で、李适が軍をおこし漢城（ソウル）を侵略するので仁祖王は公州に逃れた。都元師の張晩が李适を殺したが、李适の部下である除牙之が逃亡したため、沙也可が追いかけて捕まえた<sup>9</sup>。これにより4度目の褒賞である除牙之の土地を賜るが、その土地を朝鮮の政府に返すのである。5 回目は丁卯胡亂、6 回目は丙子胡亂で満州族の侵略に抗戦したのである。

上の記録の通り沙也可はまぎれもなく実存した人物というだけでなく、『承政院日記』には「降倭領将金忠善」と記録されており、「領将」の「領」は軍政上、千名単位を「領」といい、その部隊長が「領将」を指すことから沙也可が部隊長として活躍していたということが分かるのである<sup>10</sup>。

### 3. 植民地時代の沙也可

#### 3.1 沙也可の否定

沙也可は、前節でも述べたように実在し、朝鮮の歴史のなかで多大な功績をあげているのだが、以来は、どこにも沙也可という人物の名は表れて

---

8 朝鮮時代は上下の区分と東班：文官、西：武官で区別された

9 『承政院日記』1628年 4月 23日

故适変時逃命降倭追捕一事其時本道監司皆委於此人不勞而能除之誠為可嘉

10 金在徳（2000）前掲書 64頁

いない。

1907年に日本は、大韓帝国に統監部をおき、1910年には朝鮮総督府を設置し大韓帝国を植民地時代化した。朝鮮総督は日本軍の現役の中で任命され、天皇に直属され、立法・司法・行政権及び軍隊の支配権も掌握した。このような時代の変化によって、日本と深く関係がある沙也可は、朝鮮が植民地になると、初めて登場するようになった。

日本の研究者たちは、沙也可の子孫が住む大邱にある友鹿洞の現地まで足を運び様々な調査を始める。この研究者たちによる調査および報告が出されるが、ほとんどの研究者たちは沙也可に関する調査に否定論を出している。

幣原坦<sup>11</sup> は、1924年『朝鮮史話』で「沙也可の人物上の疑問点」を三つあげて指摘している。

第1に、沙也可の名に対するものである。金応瑞が日本に副使として行く時、それに託して沙也可の兄に伝言を請う書があるとして、見れば本籍を話さない訳がなく、日軍の先鋒隊に、三千の兵を率いる位の人ならば日本名がわからないはずはないと述べている。

前節でも述べたように、『承政院日記』に「…降倭領将沙也可…」とある中の「領将」というのは、千人以上を率いる武将に付けられる名称であるので、幣原の推測に基づいたこの論は説得力がないと考えてよいであろう。

第2に、その行動が怪しいといい、釜山上陸後、直ちに戦意のないことを公言して、朝鮮の節度使と和を講ずるなどということは、気が張りきっている日本武士にあり得ないと述べている。この論も、『朝鮮王朝実録』に降倭が朝鮮で多大な活躍をしたという記録が残っている事を考えれば、幣原は降倭に対する知識を持たないまま推測でのみこれを主張していると考えられる。

---

11 幣原坦 (1924) 『朝鮮史話』 富山房 316～320頁

第3に、釜山付近や慶州で、日本兵を破っているのが信じられないと言  
い、その根拠として、日本の他の記録には「日本兵の向かうところ敵はな  
く、ほとんど無人の境をいくようであった」とある点を挙げている。

彼は朝鮮時代の『朝鮮王朝実録』および、『承政院日記』の沙也可の記録  
には全く触れていない。

1915年に、『慕夏堂集』で数名の研究者が『慕夏堂文集』と沙也可を論じ  
ている。

青柳綱太郎（南冥）は、沙也可なる姓名の日本人はいないと述べ沙也可  
の存在を否定している。

河合弘民は、「金忠善の言に及ぶものを見ず、然るに今日尚如此偽書を信  
じ沙也可の如き売国奴の同胞中にありしことを信ずるものあるは遺憾の極  
なりと云ふべし」とし、河合自身は沙也可の存在を否定しているが、当時  
の日本人で沙也可の存在を認めて信じる人がいたことをほのめかしている。

山道襄一は「沙也可の本體疑問に属す、或は思ふ若し彼が我軍中の名も  
なき一侍が韓軍に投降して命乞ひを爲したる者に非ずとすれば彼の高麗末  
朝以来九州武人商人等の支那及び半島沿岸海を荒らし所謂和寇を業とせる  
も尠からざりしが彼等は遂に半島沿岸に割據して朝鮮民族と雑婚したるが  
故に此等混血児中稍我軍の事情に通じたる輩が偽って日本武将と稱し韓軍  
に投じたるに非ざるなきか」と記してある。この文章でも、やはり沙也可の  
実在を調査して正しい証明をするという努力は見られず、否定を前提とし  
て沙也可たる者自体を抹殺させる姿しか見られないのである。

内藤虎次郎は、「かの文集は全然仮託にて多分後人の手に成り候ものと確  
信致候実は右の理由にて積極的の偽作証拠を挙ぐる程の研究も不致候但し  
常識より推し候ても当事の日本人にかくの如き文章等出来可申答は無之、  
これ丈は明白無疑ものに付右甚だ不満足の御答にて慚愧の至りながら聊か  
卑見申述候」と述べており、沙也可の実在を否定している。

上記で述べたように当時の研究者は「沙也可」の存在を否定しているが、  
「天皇のために命を捧げてまで戦う」日本人の望ましい姿とは程遠い沙也

可という「裏切り者」を否定せざるを得なかった時代の雰囲気を読み取る事が出来る。河合が嘆いたように、当時の日本人のあいだでもかなり沙也可の存在は知られていたと見え、研究者や為政者らはそれが実在した人物として証明された時の反響を恐れていたようにも推察できる。

### 3.2 沙也可の肯定

前節では日本の研究者による沙也可の存在の否定論について論じ、日本帝国時代に、ほとんどの研究者が否定論を主張している中で沙也可の存在に対する肯定論を主張し、その存在を認める動きもあったことを述べた。沙也可に対する肯定論は否定論と同様、1915年の『慕夏堂集』で研究者が『慕夏堂文集』と沙也可について論じている。

まず、朝鮮総督府通訳官であった福田幹次郎は、上述での沙也可の否定論の中で、「当時の武士として彼のように文事あるものにして投降するということは信じられない」と主張している論に対して、「文禄・慶長の役の時に多数の降倭があった事を思えば、沙也可という存在も珍しくもない」と指摘し、また、「文章が朝鮮人臭い」ことに対しては、「文章中の記事は韓廷より附け置きたる吏人の筆に成り偶々沙也可に聴書きしたるものありやに思はれ…」と論じ、沙也可存在の否定論者を反駁する形で沙也可の実在を肯定している。彼はこの文章で文禄慶長の役の時に多くの降倭が朝鮮に帰化した事実に触れ、日本側でも降倭の存在を認めているという事を示した。しかし『慕夏堂文集』の文章について触れた部分では、「文章中の記事に関しては、韓廷より吏人の筆に成り…」云々と個人的な見解で答えている事が分かる。いずれにせよ、福田も『朝鮮王朝実録』などの記録による証明という形でなく、幣原らと同じように推測で論を展開しているような感が強い。

次に、文部省外国語学校 前韓語教師であった延浚は、次のように述べている。



慕夏堂金公忠善日本人也余幼時因故老略聞慕夏堂之事行又知其雲仍之世居大邱矣向於其遺文譯出之際得見講和書可以知歸化之本意也公歷三亂而效忠樹勲終蒙兩朝之褒典ト居一洞而著家訓垂裕後昆久為鄉井の欽誦惜乎其偉績美行不盡傳干國乘抑為羈旅人而然耶誠史家之欠事也集中有諸公往復書而其鑄銃搗藥之法親自分教各陣使之精鍊以補軍器之不利屢立寄功於是乎確知銃藥之自公始毋疑也且公以先鋒首先渡海而不載於本國史策雜出干逸史者意以謂當時諱其事母怪乎不書及金公應瑞之使日本也托之探聽鄉耗其父母昆弟亦無被坐之報未嘗不掩卷欣然繼之以一疑存焉今者青柳君貽書要余言非此書類歟略書瞥見如右大正四年六月上澣弘農延浚書

この中で沙也可は日本人であると主張した。その根拠として、幼時より故老から聞いている事や、『慕夏堂文集』、金忠善と朝廷関係者の往復書簡、金應瑞に託して日本の郷里の父母兄弟に消息を伝えたことを挙げている。この文章からして文禄・慶長の役以降相当の期間が過ぎているにもかかわらず、一部の日本人の間では沙也可の話が受け継がれていたことが分かる。しかし、この論も幼時の時の記憶によるもので、記録による証明には至らない問題点を抱えている。

朝鮮総督府 高等法院判事<sup>12</sup>であった浅見倫太郎は、慕夏堂のことは宋時烈らの中国崇敬思想の影響により、捏造贋作したものと論じ、「金忠善と慕夏堂とは別個に観察し沙也可の姓も金忠善の名も或は実在せしやも知れず」と述べ、『慕夏堂文集』は統監時代に世に現われたと指摘している。

沙也可＝金忠善＝慕夏堂であることは認めておらず、ただ、沙也可や金忠善に対する人物の実在の可能性だけを述べている。このように浅見も、同一人物を二分化、あるいは慕夏堂だけを切り離し、沙也可の実在に対して葬ろうとする曲がった先入観が働いていると考えられる。

---

12 朝鮮研究会（1915）6頁～9頁

### 3.3 中村栄孝の証明

以上で見てきたように、謎は解明されないまま昭和に入ると、朝鮮総督府の朝鮮史編纂会修史官であった中村栄孝が『朝鮮王朝実録』の宣祖朝から「降倭僉知沙也加」の記録を発見し、また『承政院日記』の仁祖朝に収録された記録からは「降倭領将金忠善」を発見した。中村は沙也可に関する記録を朝鮮時代の資料から発見し、これを根拠に沙也可の存在を証明したのである。そして、1933年1月25日に友鹿洞の金忠善後孫家を訪れて沙也可に関する関係資料を調査したのである。中村は友鹿洞を訪れた時、1630年（仁祖8年）12月16日付の正憲大夫金忠善から金生員某にあてた長男慶元の婚書（金相玉家蔵）を見ることができたと記しており、ここでの発見をも含めて1933年、『青丘学叢』第12号に「慕夏堂金忠善に関する資料について」を発表した。その後1942年に多少の修正を加え、『大邱府史』にも載せている。日本帝国時代に沙也可を仮空の人物とする否定論の所見が示されたが、中村による『李朝実録』及び『承政院日記』の発見で、金忠善・沙也加＝沙也可である存在の人物として証明されたのである。

次に、中村栄孝が1969年に『日韓関係史の研究』一―中―、に収録した「朝鮮役の投降倭将金忠善」に関して載せた資料を検討する。

中村が発見した記録のうち、『承政院日記』には金忠善の伝記に関してさらに詳細に書かれている。

まず、崇禎元年（仁祖6・1628年）4月23日に、次のような記録がある。

御營庁啓曰、山行砲手十七名・降倭子枝二十五名、自陣上率来、並置本庁之意、曾已啓下矣、其時、降倭領将金忠善称名者、為人<sup>ニ</sup>不特胆勇超人、性亦恭謹、故适変時、逃命降倭追捕一事、其時本道監司、皆委於此人、不勞而能除之、誠為可嘉、聞其所言、其子枝中可用而落漏者亦多、若有朝廷別抄作隊之事、則渠当招集、聞変上来云、此輩之今番從軍者、依前例、為先復戸一結、自中子枝之落漏者、亦令本道查出、成冊上送、所持鳥銃・環刀、以本道軍器所上中、拵好分給、常行操鍊、有変即為上送之意 本道監・兵使処、一体知委、如何、答曰、依啓、御營謄録

上記の内容は、『承政院日記』の中で英祖の時代に書かれた「改修日記」の部分にある記録で『御営庁謄録』<sup>13</sup> から抄出して収録されたものである。この年は、後金（清）の第一回朝鮮侵略（丁卯の胡乱）の翌年にあたる。

記録の内容は、戦後に、山行砲手17名および降倭の子枝25名を陣中から連れて来て、御営庁に属させた時の事を叙し、さらに降倭の役属について論じた上啓である。これには、次のような記載がある。

- ① 降倭領将金忠善という者があって、人となり、ただに胆勇人にこえていたばかりでなく、性質も恭謹であったこと。
- ② 金忠善は、李适の変のとき、慶尚道監査（李敏求）の委嘱をうけ、李适に属していた逃命の降倭を追捕して功を立て、今回の戦役にも降倭を率いて従軍していたこと。
- ③ 金忠善が、降倭の子枝中、用うべくして、まだ、徴集漏れになったものが多いから、もし朝廷に特別部隊編成の意志があれば、みずからこれを招集し、変を聞けば上来するといったこと。
- ④ 今回の戦役に従軍した降倭は、前例によって、まず毎戸一結を復し、同類子孫の落漏者は、慶尚道が調べ出して、降倭の籍を作り、中央に提出し、所持の鳥銃と環刀は、本道軍器所の備えつけを分給し、つねに操練をおこなわせ、事変があれば、中央に出動させるようにしたこと。

上記の記載にあるように、李适の反乱の時多数の降倭が参加してその先鋒となって戦い、仁祖が都を脱出したことはよく知られている。このとき、朝廷では、釜山倭館に対して滞在中の倭人に救援を求めようという意見も出たが、慶尚道監査李敏求の命をうけた降倭の勇将金忠善が反乱降倭部隊の追放に功績をあげたのである。

『御営庁謄録』の原本は、英祖朝の火災により今日に伝わっていないが、『承政院日記』改修のときに採録された記事は、出处確実として疑う余地

---

13 朝鮮時代、御営庁で行った様々な行事を日記体に記録した歴史書。

はあるまいと中村は述べている。

次に『朝鮮王朝実録』には、宣祖30年丁酉（1597）11月己酉（22日）条<sup>⑦</sup>に、僉知の「沙也加」という名の降倭の記録が書かれている。『慕夏堂文集』の「沙也可」と、同音異訳であることは、間違いないであろうと中村は主張しているのである。

また、金忠善が、長男慶元の婚書のために金生院に送った納采の牋紙で、押までも墨色筆致が同じであるから、金忠善の自筆として疑う余地はないと中村は判断している。中村は上記で述べたように実際に1933年に友鹿洞を訪れ、その婚書を自ら確認したのである。

金忠善啓、長子慶元、年大既長成、未  
有伉儷、伏蒙  
尊慈、許以  
令女、茲以賢聖之礼、何敢不従、敬  
遣使者、謹行  
納綵之儀、以遵  
先典、只此伏惟  
尊鑒、不宣、謹再拝  
上状  
崇禎三年庚午十二月十六日、正憲大夫金忠善（押）

以上、中村による朝鮮時代の『朝鮮王朝実録』及び『承政院日記』における記録の発見で沙也可の实在が証明されたのみでなく、これによって「沙也加」=「沙也可」=「金忠善」=「慕夏堂」であることも証明されたのである。それまで様々な噂や推測だけで論じられていた沙也可は、ここで初めてその正体が明らかになったのである。

### 3.4 沙也可の实在が否定された背景

帝国主義時代という特殊な状況で、日本を裏切って朝鮮に寝返った武将の存在を肯定したいと考える日本人はあまりいなかったであろうことは容

易に想像はできるが、ここで、その歴史的背景について研究をした筒井博人の論文を参考にその理由を探してみたい。

筒井博人は、『東アジア研究』に投稿した論文「沙也可なぜ忘れられた」<sup>14</sup>で沙也可が日本でその存在を否定され、忘れられていた背景について江戸期以降の長い豊臣秀吉人気が一つの背景としてあるのではないかと指摘している。

明治期に入って、秀吉の人気に拍車をかけたのは実は明治政府であるという意見もある。小和田は「明治以降、秀吉がもてはやされ、英雄視されていくことと秀吉の朝鮮侵略が密接不可分の関係にあったからであり、それまでの江戸時代までにみられた、民衆の中の反幕府的気運からくるいわゆる『太閤びいき』とはまったく異質な形で秀吉人気が形づくられ、太閤伝説が再生産されていった」と、人気の変質を指摘している。

昭和にはいると、政府のバックアップを受けた「秀吉神話」はますます勢いを増し、1942年 高須芳次郎の「日本近世転換期の偉人」では、秀吉は「朝鮮遠征によって日本の国威をあげ（外交上には失敗したが）、南進日本政策を執って大東亜共栄圏の建設という点に頗る心した」と当時の日本の膨張主義と重ねて位置づけられていることに言及している。

確かに、筒井が述べたように日本では朝鮮侵略を敢行した秀吉に対する英雄化された伝説は代々伝わっており、今現在もそのイメージが広く一般人に残っている事は否定できない。秀吉が朝鮮に兵を出す事に意義を見つけられず反旗を翻した沙也可は、日本で秀吉の人気が高揚するにつれてさらに否定の方向に向かっていったことが想定される。本稿から見て戦後にも沙也可研究が長い間あまり盛んにならなかったことも納得される。

---

14 筒井博人（2003）「沙也可なぜ忘れられた」『東アジア研究』東アジア学会 80 頁

## 4. 戦後の沙也可研究

### 4.1 司馬遼太郎

1965年、日韓が国交正常化して4年後、中村栄孝は1969年に沙也可に関する論文「朝鮮役の投降倭将金忠善」を1933年に引き続き発表した。それから2年後の1971年から1972年にかけて、司馬遼太郎が週刊朝日の連載に「街道を行く・韓のくに紀行」で沙也可を取り上げたのである。

新聞の連載が終わった1972年には週刊朝日に連載された『街道を行く二・韓のくに紀行』が書籍としてまとめられ出版されることになる。

司馬遼太郎は、「日本の長い内戦のルールによって、降伏者はすぐさま敵側で働いて昨日までの友軍に矢を射る。沙也可はこの点では少しも悩みがなかったであろう」と述べ、朝鮮に投降し即座に日本軍に刃を向け、その後も朝鮮王から優遇されたことは事実と相違ないと主張している。

しかし、沙也可の足跡が綴られている『慕夏堂文集』に関しては、疑問が残るとしている。その理由として、『慕夏堂文集』には「少しも倭臭がなく、むしろ韓臭の漢文である」ことを挙げている。司馬は発見者である沙也可六世の孫の金漢祚そのひとの文章でないかという幣原坦の否定論を、ごく自然な推論であると指摘しつつ、たとえかれの手記が六世の孫の金漢祚の偽作になるとしても、記述のあらかたは伝承どおりであるに相違ないと沙也可の存在自体に関してはかなり強く確信している。

前も述べたように日本では長い間沙也可の存在について触れることを避けてきたのは事実のようだが、司馬の紀行文はそういったあり方を変える役割も果たしたのではなかろうか。これはまた、時代とともに沙也可の認識が変わりつつあることを意味していると言えるのではなかろうか。ここで沙也可は再び歴史の表舞台に登場することとなったのである。

#### 4.2 文禄・慶長の役400年

1992年は、1592年の文禄・慶長の役から数えてちょうど400年にあたる年であるが、この年を記念して NHK で北島万次著『豊臣秀吉の朝鮮侵略』を基にした「歴史発見—出兵400年 秀吉に反逆した日本武将—」が放映された。この放送は、それまでの文禄・慶長の役に関する定説を覆し、むしろ敗戦の原因を、秀吉軍の逃亡と朝鮮への帰化にあることを沙也可の紹介とともに提示している。なぜ兵が足りないのか。この兵の不足を、放送では、降倭や逃亡者の存在にあるとしている。国内での多くの反対や反発を押し切った出兵と、際限なき軍役に兵は大きな恨みを持っており、また戦局が長期化し悪化すると、それに耐えかね船に乗って日本に引き返す兵や、朝鮮に帰化する兵が増えたのが原因であるとしている。その降倭の一人が沙也可であり、彼が鳥銃を朝鮮に伝えたことにより鉄砲部隊が朝鮮にもできたというのである。

これは一つのテレビ番組に過ぎないが、番組の持つ意義は大きいと考えられる。まず、文禄・慶長の役の敗因を降倭という新しい要因から探り出している点である。これは、それまで壬辰倭乱（文禄・慶長の役）の勝因として降倭が挙げられることのなかった韓国にも影響を与えたという点で意義は大きい。

壬辰倭乱（文禄・慶長の役）の400年を期して、大阪と名古屋でシンポジウムが開かれた。1 回目は、1992年11月14日に大阪城・大阪国際平和センターで1992年11月15日には名古屋朝日ホールで開かれたが、特別来賓として韓国の友鹿洞より沙也可の子孫である14代金在徳が招かれて講演を行った。2 回目は、「慶長の役」が起きた1597年を記念し、1997年11月15日に前回と同様、大阪国際平和センターで「再びなぜいま沙也可か」という題を掲げ、沙也可を検証するシンポジウムが開かれた。

今まで日本では、文禄・慶長の役に関して朝鮮の立場にたって戦争の被害について論じられることはあまりなく、文禄・慶長の役は常に美化されてきたのである。従って、このように文禄・慶長の役に対する正しい情報

発信は重要な意義を持つと考えられる。またこのシンポジウムが400年を期して、秀吉の本拠地である大阪城で一般の人々にも公開されたものであったことは大変意義があると考えられる。

#### 4.3 1990年以後の沙也可研究の推移

1990年以降になり、日本でも活発に沙也可の紹介が行われ、研究論文も増えた。中には沙也可の末裔を自らの目で確認し長老の話を聞いて記事にまとめた井田真木子<sup>15</sup>や、秀吉の第1次派兵の時、半年もしないうちに兵力が半数に減り、京都の本能寺に対して名護屋や朝鮮から脱走してきた者を泊めてはならないと文禄元年3月に秀吉が「朱印状」<sup>16</sup>を出したこと、船を漕ぐ水夫たち、食料や武器を運搬する荷駄隊の人たち、築城工事に携わる土木方の人々などの労役に動員された人々は戦争で頑張っても武士や兵が受けるような褒美はほとんど期待できないのが当時の現状であったことをあげ、沙也可のような降倭があっても不思議ではないと主張した仲尾宏<sup>17</sup>などの日本人研究者がいた。また李正伯<sup>18</sup>は、朝鮮が日本軍と戦って初めて勝った全羅道の戦闘地で、「癸卯八月慕夏堂後孫金日淳」と書かれた「梨峙大捷遺墟碑」を発見したことを紹介している。

#### 4.4 日韓の教科書に沙也可が登場

多くの研究者の史実の発掘や研究成果により、いまや沙也可の存在は定説となり、今まで日本では一般には知られていなかった史実が広く周知されるようになると、降倭の存在を学生に教えるべく教科書がそれを取上げるようになった。韓国においてもそれよりも時期を少し早くして中学校の

15 井田真木子 (1992)『マルコポーロ』「日本人を祖先にもつ沙也可一族の村一日韓の間に生きた400年 (スキだけどキライな韓国)」56頁

16 花押の代わりに朱印を押した古文書

17 仲尾宏 (1999)「秀吉の朝鮮侵略と降倭・沙也可」『人権講座公演録』

18 李正伯 (2003)「遥かなる降倭沙也可を追跡せよ(1~4)」『アプロ21』7(1) 44~45頁



道徳教科書に沙也可が取上げられている。日本においては1999年にはじめて沙也可が教科書に登場することになった。ここでは沙也可という人物が両国の教科書でどのように取上げられているのかを紹介する。

まず、韓国の中学校の道徳教科書<sup>19</sup>には次のような記述がある。

壬辰倭乱の際、日本に「沙也可」という武士がいた。彼は幼い頃から武士修業の傍ら、文の読み書きにも励み文武両道を兼ね備えた武士であった。壬辰倭乱（文禄・慶長の役）が起ると、沙也可は加藤清正の先鋒将として朝鮮に上陸した。ところが、進撃する途中、不思議なことを目撃した。それはある農夫の家族が乱を避け移動する光景であった。

数千人の日本軍が鳥銃を発砲し迫ってくるのに、農夫は年老いた母親を背負い、農夫の妻は風呂敷包みの荷を頭にのせ、子どもの手をつないで歩きながらも姿勢は少しも崩さず山道を登っていた。その光景に沙也可は深い感銘を受けた。あのように善良でおとなしい民を害するのは聖賢の教えに背くと気付かされた。幾日か思い悩んだ末に、沙也可は自分に従う兵卒500余名を率いて我国（朝鮮）に帰順した。

韓国では、日本の武将沙也可が韓国の礼儀である孝に憧れ帰化したことを正面から取上げることによって儒教的教えである孝が美しい美德である事を強調している。一方、日本の高校の教科書<sup>20</sup>には、「朝鮮側に投降した日本武将／順倭と降倭」と題して次のような記述が見える。

秀吉の朝鮮侵略は、多くの人々をその渦中にまきこんだ。捕虜として日本に連行された人もあれば、さらにヨーロッパへ転売された人もあった。また、朝鮮人でありながら日本側についた人もいた。彼等は順倭と呼ばれている。順倭の中には、心ならずも日本側の手先になった者もいれば、もともと朝鮮国家にうらみをいだき、日本軍の侵略をきっかけに積極的に順倭になった者もいた。そして、日本軍のなかにも朝鮮側に投降した者がいた。彼等は降倭とよばれている。彼等のな

19 ソウル大学校師範大学 1 種図書（1998）『道徳・倫理』研究開発委員会 82～83頁

20 文部省検定済教科書（1999）『高校日本史 A』実教出版株式会社 48頁

かには長陣による兵糧不足と厭戦気分から降倭になった者もいれば、はじめから秀吉の海外派兵に疑問をいただき、積極的に朝鮮側に投降した者もいた。

韓国の教科書が儒教の孝や徳を教えるために沙也可を取上げているのは異なり、日本の教科書では歴史の事実を伝えているだけである。朝鮮に帰化した兵である降倭と、日本側について日本の手先になった順倭の存在も史実として記述している。

この二つの教科書が持つ意味は、歴史的事実として定説になっていた降倭の存在が教科書に載ることで完全にその実在性を確保できたことである。

## 5. お わ り に

本稿では日本における沙也可研究の諸相と評価の変遷を辿ってみたが、韓国は文禄・慶長の役に活躍した沙也可をはじめとする降倭の存在に触れることを意図的に避けてきた。それは、推測に過ぎないが、韓国の歴史上もっとも大きい戦争の一つであり、多大な被害を被った文禄・慶長の役の時、朝鮮人自らの力でなく敵軍だった降倭の力を借りて戦い、それが勝利の大きい要因の一つであったことを史実として容認したくなかったのではなかろうか。また日本の方からすれば日本軍を裏切り敵軍について敗戦に導いた降倭を評価したくない、むしろその存在自体までも否定したいという動きもあったのは事実である。

慕夏堂記念館である「忠節館」の落成をきっかけとして1998年6月19日には沙也可の研究組織である「慕夏堂思想研究会」が発足した。さらに東京をはじめとする大阪、京都、広島、名古屋、愛知県、奈良県、栃木県、千葉市、愛媛県松山市、滋賀県近江八幡市に11の支部が置かれている。この研究会の主な活動は慕夏堂の生涯と思想研究を始め、慕夏堂史蹟の保存及び復元、日韓の文化交流や歴史文化の共同研究、友好親善、友鹿里の観光振興と、開発に対する提案、忠節館の展示品の収集、慕夏堂思想研究基

金の募金活動などである。かつて沙也可を全面的に否定しようとした日本で、このような動きのある事は評価できることであり、今後も歴史の正しい評価に多く貢献するであろう。

本稿では、降倭である沙也可に関して述べてきた。沙也可は彼の記録である『慕夏堂文集』を残し、その村を持つことでその存在を明らかにする事ができた。しかし、当時の朝鮮には多くの降倭が存在し、戦争で多大な功績をあげているのも事実である。降倭は、朝鮮で余生を送りながらも敵国の兵として堂々と日本人である事を名乗れずに暮らしており、一般的に日本を裏切った裏切り者として扱われている。このように、裏切り者としてしか認識されないまま歴史の陰に隠されている降倭の真実に迫る努力は今後もなされるべきであろう。この研究は今後の課題として追求していきたいと考える。

## 参 考 文 献

### 論文

- AERA（1992）『400年の恩讐を超えて—イタリア，韓国，日本に住みついた人々』  
井田真木子（1992）『日本人を祖先にもつ沙也可一族の村—日韓の間に生きた400年（スキだけどキライな韓国）』マルコポーロ 2  
仲尾宏（1999）『秀吉の朝鮮侵略と降倭・沙也可』人権講座講演録  
徐季教（2000）「慕夏堂金忠善（沙也可）思想研究」東西大学産業経営大学院 修士論文  
小山帥人（2001）『不正義の戦争から脱走し，日本軍と戦う——戦国武将，沙也可が問いかけるもの』部落解放  
アプロ21（2002）「韓日関係掘り起こし史 沙也可の謎を解く」『アプロ21』6(9)  
李炳宗（2002）「韓国に息づくサムライの血脈」『ニューズウィーク日本版』  
ニューズウィーク日本版（2002）『歴史 韓国に息づくサムライの血脈（日本）』  
李正伯（2003）『遙かなる降倭——沙也可を追跡せよ（1）』アプロ21  
『遙かなる降倭——沙也可を追跡せよ（2）』アプロ21  
『遙かなる降倭——沙也可を追跡せよ（3）』アプロ21  
『遙かなる降倭——沙也可を追跡せよ（4）』アプロ21  
文慶哲（2003）『朝鮮を三度も救った日本人「沙也可」』総合政策論集

資料

- 金忠善 (1842) 『慕夏堂文集』 出版者不明  
青柳綱太郎 (1915) 『慕夏堂集』 朝鮮研究會  
国史編纂委員会 (1961) 『承政院日記』  
国史編纂委員会 (1969) 『朝鮮王朝実録一宣祖一』 影印縮刷版  
賜姓金海金氏宗会編 (1996) 『慕夏堂文集附實記・国譯註解』

書籍

- 徳富猪一郎 (1935) 『近世日本国民史—豊臣氏時代—』 明治書院  
中村栄孝 (1965－1969) 『日朝関係史の研究上・中・下』 吉川弘文館  
(1966) 『日本と朝鮮』 (日本歴史新書126) 至文堂  
司馬遼太郎 (1972) 『街道をゆく二・韓のくに紀行』 朝日新聞社  
金 在徳 (1995) 『三乱功臣慕夏堂金忠善論文集』 大一出版社：大邱  
金 在徳 (1998) 『再び今なぜ沙也可か・帰化した侵略兵を訪ねて友鹿洞への道』 大  
一  
ソウル大学校師範大学 1 種図書 (1998) 『道徳・倫理』 研究開発委員会  
三橋広夫 (1999) 『実践記録・中学歴史 降倭将沙也可を通して学ぶ秀吉の朝鮮侵略  
(特集中学校の世界史学習)』 歴史地理教育  
文部省検定教科書 (1999) 『高校日本史 A』 実教出版株式会社  
金 在徳 (2000) 『沙也可の謎を解く』 Book Land：大邱

## Summary

### Change of Evaluation on Naturalized Warlord, Sayaka

Bosup Lee

Nakamura Eico, who was the manager of Jossoen History Compilation Committee of Jossoen Government General, discovered the existence of Sayaka (Choong Sun Kim) in the records such as “Josseon Royalty Chronicles” and “Seungjungwon Diary”.

This paper has reviewed how Sayaka, who was a Japanese naturalized during wartimes, has been evaluated by the Japanese historians from the era of Bunroku・Keicho-noeki, or in other words, Japanese Invasion of Korea in 1592 to era of Japanese Imperialism, era of post-liberation, and today based on such records. First, the positive and the negative claims on Sayaka by Japanese historians were reviewed. Then, history of change of Sayaka from the authentication of Sayaka by Nakamura Eico to introduction of Sayaka in Japanese textbooks has been reviewed chronically.